

地域と学校の 「協働」の土壌は どのようにして 育まれたのか？

島根県の益田市では、次世代育成を「ひとつくり」と捉え、多様な大人との対話や協働を通して地域全体で子どもたちを育む「ライフキャリア教育」を10年前から実践しています。地域と学校の協働が日常となっている背景や取組について、関わる各方面の担当者の方々にお集まりいただき座談会を開催しました。

廣田理史先生
島根県立益田高校
益田市内の進学校でSSH担当。
地域連携を急伸させている。

石川有里さん
益田市西益田公民館
公民館主事
子どもと大人をつなぐ地域連携の
要となっている公民館の、生徒たち
の相談役。

三宅康将先生
島根県立益田養護学校
地域連携セクション
学校運営協議会をフル活用し、卒
業後も生徒が生き抜く力をつける
羅針盤を作成中。

檜垣賢一さん
一般社団法人豊かな暮らしラボトリー
(略称：ユタラボ) 代表理事
中間支援団体として取組開始時から地
域と学校、生徒をつなぐ活動に従事。

中島尚子先生
島根県立益田翔陽高校
総合学科科長
課題研究(探究活動)で地域連携を
必須とし生徒と地域をつないでいる。

桐 雅幸さん
益田市教育委員会
ひとつくり推進課 社会教育主事
市の「ライフキャリア教育」を推進し、子
ども大人も輝くまちづくりを進行中。

Prologue

【益田市の「ライフキャリア教育」とは？】

幼児期から青年期まで、学校と地域の 多様なプレイヤーが縦横に連携

「自分はどうかありたいか」を
職業以外の大人の姿から学ぶ

島根県の西端に位置する益田市。合計特殊出生率は国や県の平均よりも高く推移しているものの、進学や就職による青年層の人口流出や、少子高齢化による人口減少が長年の課題となっていた。高度経済成長期から「過疎」発祥の地と言われてきたこともあり、島根県の取組である「ふるさと教育」や職業観を育成するキャリア教育に力を入れてきたが、青年層の人口流出に歯止めはかからなかった。

こうした背景から、2015年の「益田市総合戦略」において、人口減少問題の克服と持続的な発展に向け、幅広く将来の地域を担う人材の育成、「ひとつづくり」を目指し、改めて「益田市ひとつづくり協働構想」を策定。「ひとが育ち 輝くまち 益田」をまちの将来像に掲げ、市政全体でひとつぐりに取り組み始めた。

市の教育委員会では、従来のキャリア

教育が、職業観に偏重した「ワークキャリア教育」であったことが、生徒たちが都会志向になり市外への流出の一端を担ってしまったのではないかと考えた。また、地域についての「ひと・もの・こと」を「知る」ことに留まっていたふるさと教育に対して、地域の人々と出会い、つながり、対話し、協働することで子どもたちの人生観を育む地域教育を目指すこととした。職業人として以外の余暇や家族人としての顔ももつ地域の大人たちの姿に触れ、「自分はどうか生きたいか？ どうかありたいか？」を考える「ライフキャリア教育」へと舵を切った。

10年間の継続で、若者の
地域への意識が確実に変化

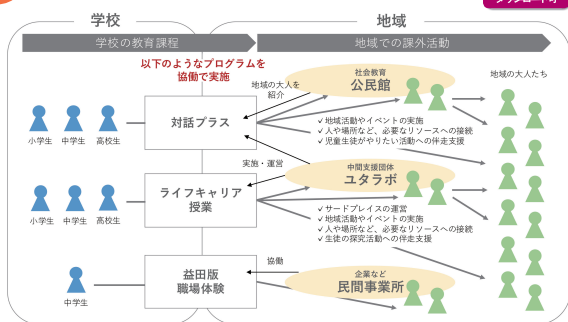
益田市の「ライフキャリア教育」の特徴の一つは、学校教育課程のなかで生徒全員が受けるプログラムにおいて、地域の大人と語り合う場を設定していることだ。学校と地域の接続には、地域の公民館や、「豊かな暮らしラボ

ラトリ」（以下、ユタラボ）という中間支援団体など外部の支援を受けることで、幅広い地域の人々とつながる横展開が可能になっている（図1）。

もう一つの特徴は、幼児期から青年期まで成長段階に合わせた取組を行い、地域との関わりを段階的に広げていきながら、生徒自身が下の世代のロールモデルとなっていく縦展開の循環を構築していることだ（図2）。

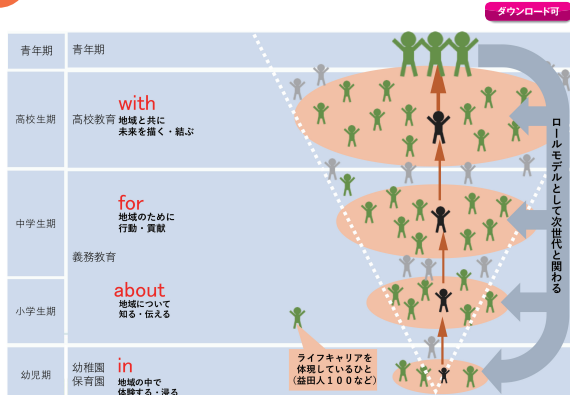
縦横のプログラムで地域の大人や支援組織との連携をきっかけに、公民館やユタラボの伴走支援を受けながら、生徒たちは学校教育課程以外にも個

図1 学校のプログラムを地域資源が支える



出典：林知里「地域における学びと当事者性の育成－島根県益田市の「ライフキャリア教育」に見る、高校生の変容に着目して－」2024

図2 発達段階ごとの活動を通し、次世代のロールモデルに



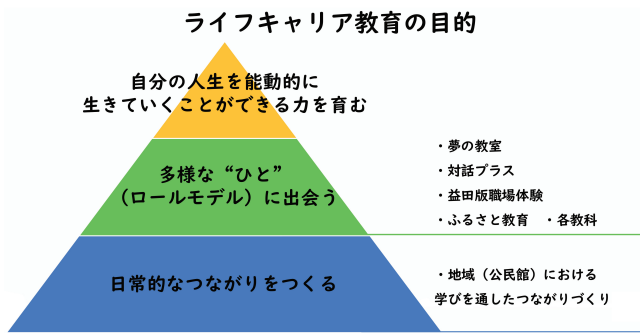
「益田市の未来を担うひとつづくり計画」より

人的な地域での探究活動や、地域活動に参加し始める。「ひとつづくり」を共通の上位概念に、家庭や学校外の大人たちが子どもたちを引き受け、地域全体で子どもたちを育てていく環境が創られている。10年間取組を続けてきたことで、一度まちを出た若者が戻ってくるなどの成果が見え始めている。

異なる立場同士で施策を進め、継続してきた秘訣や、それぞれの立場について、「ライフキャリア教育」を支え、実施している多方面の関係者の方々に、お集まりいただき、語り合ってもらった。

取材・文／長島佳子
撮影／原田玲愛
取材企画・協力／林 知里

図3 益田市のライフキャリア教育の目的



Chapter 1

【取組の始まり】 地域連携の 目的は？

——益田市の「ライフキャリア教育」の中心的プログラムが「対話プラス（旧称・益田版カタリ場）」（25ページ左下コラム参照）とのことですが、対話を重視した背景にはどんなことがあったのでしょうか？

桐（教育委員会） 益田の子どもたちはもともと地域の人にはきちんと挨拶

しているし、都会の子どもに比べてら圧倒的に話していると大人は思っていたのです。ところが、2018年に益田版カタリ場の事前アンケートを実施したところ、「地域の大人と話す機会がよくある」という問いに対し、61%の中高生が「そう思わない」と回答し、衝撃を受けたのです。

檜垣（ユタラボ） こうした地域課題に取り組もうとしたときに、当時の教育委員会の社会教育課の課長が「市の中だけで考えたなら、発想が限定的になってしまっだろう」と、外部の専門的な力を求め、島根県教育庁の教育魅力化特命官だった岩本 悠氏やNPO法人カタリバ代表の今村久美氏などに声をかけ、支援を仰いだのがスタートでした。外部の有識者にも入っていただいた「益田市の未来を担うひとづくり計画策定委員」で、既存のキャリア教育やふるさと教育では、同じ成果しか出ないので、もともと人と出会うような取組が必要という方向性になり、そのときに出てきたのが「ライフキャリア教育」という考え方だったのです。

桐 益田市のライフキャリア教育の最終目標は「自分の人生を能動的に生きていくことができる力を育む」こと（図3）。そのためにはどんな仕事がありたいだけでなく、どうありたいか、どう生きていきたいかという、**職業人**

知識偏重の地域教育から、 今を生きる大人と出会い、 つながるライフキャリア教育へ。

として以外の「今を生きる」大人の生き方に触れることが重要と考えました。そのために、地域のさまざまな大人とつながりをつくり、話を聞き、大人と子どもが協働する場を設けることになり、すべての小中高生が受ける中心プログラムとして「対話プラス」が始まりました。

石川（公民館） 4万人余りの小さな市でのライフキャリア教育には、地域の大人全体の力が必要です。そこで、大人も自主的に地域活動に参加する場として、公民館の位置づけが再定義されました。それまで公民館は趣味で何かやりたい人が集うような場所です。それまで公民館は趣味で何かやりたい人が集うような場所

で「ひとづくり」という意識はまったくありませんでした。そこに「つろうて（みんなで集う）」という方言）子育て協議会」という地域の任意団体を立ち上げて子どもに関わったり、「どんな地域の人を巻き込め」と言われたりして、公民館の活動がガラッと変わりました。

檜垣 今では公民館がライフキャリア

教育の要の場となっています。

——高校現場や高校生が実践しているライフキャリア教育の取組について教えてください。

桐 本来、市の管轄は中学校までですが、市内に高校が4校と高等部を含む養護学校1校があるのでユタラボさんに間に入ってもらい「益田市未来の担い手の育成コンソーシアム」という協議会に高校にも参加してもらいました。「対話プラス」は小中高では授業の一環として取り組んでもらっており、ほぼすべての生徒が参加しています。高校生は地域の大人と語り合う一方で、高校生自身が語り手として、これまでの自分の成長を振り返り、小学生に語るために自主参加しています。少し年上の先輩と話すことで小学生が中高になった自分をイメージでき、ロールモデルが循環する流れが出てきています。

檜垣 ユタラボの活動としては、各校の総合的な探究の時間や課題研究などで地域と学校をつないでいます。学



桐さん

Chapter 2

【高校と地域の連携】 学校と地域を どう結ぶか？

——今日は益田市にある県立高校と県立養護学校の先生にもお集まりいただいています、各校の現場での地域連携の取組について教えていただけますか？

中島（益田翔陽高校） 益田翔陽高校（以下、翔陽）は電子機械科、電気科、生物環境工学科、総合学科という4つの科を持つ複合型専門高校で、私は総合学科を担当しています。総合学科の科目「産業社会と人間」や課題研究で、地域に生徒たちが出て行っています。

課題研究や地域連携は生徒も教員も大変ですし、生徒のためになるのか実は最初は懐疑的でした。しかし、自分自身が育休中に、子育てする人を迎え入れてくれる地域の人々の存在

や取組が多々あることに気づいたので

す。子どもが芸術に触れて遊べる隣の市の施設を長年利用していて、家庭科教員として益田市でもそれと同じようなことを生徒と一緒に学校活動としてできるのではと考えました。

「保育履修者が家庭科で学んだことを地域で実際に還元できる取組としてやってみよう」とユタラボさんや地域の人に相談すると、協力してくれる人が次々に出てくることに驚きました。

しかも一度つながると関係が深く広くなっていくのです。市の10年間の取組について今日の桐さんたちのお話で初めて知ったので、そういうことかと腹落ちしました。

檜垣 翔陽は開校以来、PDCAを

きちんと回して地に足がついた探究をしていっています。中島先生がいましてから「地域連携するよ！」と旗を振ってくれているので、さらに生徒が実践的な経験を積むことができ、探究の深度を深めていると思います。

進路の際に地域での体験を自分の言葉で語れる生徒が多く、就職や進学

の総合型選抜で良い結果も出てきていますよ。中島 1年生の「産業社会と人間」や2年生の専門科目の授業などで地域の大人とのつながりをたくさん体験しているの、3年生の探究活動では生徒たちが主体的に動いています。

石川 それは私が言いたかった（笑）。

私たちの住む西益田は高校がないのですが、中学校までに子どもたちは公民館をフル活用しています。高校生になったときに学校の授業ではないところで「地域のイベントの実行委員になりたい」など、公民館との関わりを求めてくる生徒さんが出てきています。

地域とつながった学びで、

将来地域に貢献できる

生徒を育てる。



中島先生

高校におけるライフキャリア教育①

対話プラス

「対話プラス」は、1対1の対話を通じて「これまでの人生、今の自分、そしてこれからどんな人でありたいか」という自分自身の生き方について考えることで、自分の「心に火を灯す」授業。対話の対象は、小学生×高校生、中学生×地域の大人、高校生×益田の大人。高校生は大人と語る場と、小学生にとってのロールモデルとして語る場の両方の機会がある。運営と進行はユタラボが担当し、市内のほぼすべての小中高校で実施されている。語り合う内容そのものよりも、本気で向き合ってくれる大人の存在や、自分一人ではないと思える機会の創出を重視している。



生徒が成長して自発的に動けるようになると、地域連携での教員の負担も軽くなると感じています。

廣田（益田高校） 益田高校（以下、益高）の探究活動は、翔陽ほど地域連携はまだできていないと思います。ただ、従来一般選抜でいわゆる上位大学受験が当たり前だった空気が、高校時代の体験を活かした総合型選抜を選ぶ生徒も出てきて、ここ数年で変わりつつあります。

檜垣 外から見ると、今、地域で一番変化しているのが益高なのです。先ほどの石川さんのお話のように、中学時代までに学校外の公民館やサードプレイスで地域活動をしている生徒が高校生になっても続けているケースが益高生でも増え始め、彼らが島根大学のへるん入試などの総合型選抜で進学し始めています。

廣田 生徒たちの学外の活動を教員は把握しきれないのですが、ユタラボさんから「益高の生徒さんがこういう活動に来ていましたよ」と教えて

もらったり、進路面談で生徒から「地域活動を題材に総合型選抜で進学したい」と言われて初めて知ったりすることもあります。時代の流れもありますし、生徒たちの変化に若手教員が刺激を受け、教員側も総合型選抜に肯定的になってきています。

桐 教員の変化は高校だけでなく中学校でも起きていますね。「対話プラズ」などで外部の人が相手だと、生徒たちが自分のことを一生懸命に語る姿を見て、地域と関わっていくことの効果を先生方が感じて地域連携を広げていたりしています。中学生たちは総合的な学習の時間で公民館に出かけて行つて地域の方々とながつてプロジェクトを進めています。それが楽しくて授業以外でも休日に公民館に行つて個人的な探究をしている子もいるのです。その中学時代に学校内外で積み上げた地域との連携が、しっかりと高校の探究活動につながるようにすることが、これからの課題と感じています。

学校運営協議会をフル活用して、 養護学校と地域との 良好な関係構築を再整備。



三宅先生

——三宅先生の益田養護学校の地域連携は、翔陽や益高とは異なるつながりになるのでしょうか？

三宅（益田養護学校） 益田養護学校（以下、益養）は小中高を包括している、私は高等部の教員で地域連携セクションを担当しています。高等部の生徒は卒業後にほぼ100%地元で就職しますので、地域は生徒たちにとって生きていく場所。地域との関わりは本来欠かせないもので、学校が創立した25年前は地域活動は非常に活発でしたが、経年で地域連携が形骸化してしまい、一時途切れていた地域連携セクションが4年前に復活しました。しかし、具体的にこれからの地域との

高校におけるライフキャリア教育②

ライフキャリア授業

23ページの図1・2のように幼児期から中学校までのライフキャリア教育プログラムで積み重ねてきた経験と成長を基に、高校では実践的に社会と結びつき、自分の進路目標や生き方を考えていくプログラムを行っている。ユタラボや公民館の支援によって総合的な探究の時間や課題研究などで実際に地域に行き、地域社会における課題解決や挑戦を通じて「社会の一員としての自分」を試してみること、生徒自身がより能動的な生き方や進路目標をもつことへつながっている。（写真は益田市が認定された日本遺産を高校生の視点でガイドしている探究活動の様子）



つながりをどうしたらよいか悩み、学校運営協議会に助けを求めたのです。

檜垣 私や石川さんも益養の学校運営協議会（以下、協議会）に入っていますが、三宅先生は協議会を形骸化させず、「助けてほしい」と我々をフル活用してくれそうです。

三宅 学校にいると自分たちの立ち位置も他校の取組もわからないので、協議会の方々の情報や客観的な視点は非常に重要なのです。

石川 協議会で益養が育てたい生徒像を直接聞いたことで、地域で生きていく卒業生たちを地域のどこにつなげたいかが明確になり、協力しやすくなりましたね。

檜垣 益養では生徒が作る製品の販売や地域のイベントのお手伝いなどは以前からやっていました。従来の地域連携は地域「貢献」と捉えられることも少なくありませんでした。ですが、学校運営協議会の働きかけもあり、ここ数年で、さまざまな取組が、地域にとっても学校にとってもWin-Winで、かつ持続可能なものなのかが議論されるようになりました。

三宅 学校は生徒が卒業するまでにつける力しか考えていませんでしたが、ユタロさんや公民館の方々は卒業後のことを語ってくれて大きな気づきになりました。生徒たちに生きる力をつけたいと考えてきましたが、それは働く力だけではなく、余暇や生活の時間も含めて地域とのつながりのなかで基盤となる関係性や、自分の居場所を見つけることなのだと。ユタロさんのサードプレイスのイベントに生徒が参加して小さな実体験を積むだけでも、学校や家庭以外にも地域に居場所があることに生徒たちが気づく種まきになっています。

石川 益養の卒業生が将来の地域の創り手になることは間違いありません。地域連携セッションが復活したことによって、地域での益養の存在感が確実に大きくなっていると感じます。

Chapter 3

【学校外との関わり】 多様な組織間の 連携の秘訣は？

——教育委員会や学校が、地域や外部の組織の人々とながりをもち、継続させていくために留意すべきはどんなことでしょうか？

桐 地域連携するときに間に入ってくれる中間支援団体や公民館などの存在が非常に重要と認識することです。教育機関は生徒の成長を第一に考えますが、関わってくれる大人のメリットも考えなければうまくいきません。いかに同じビジョンを描くことができるか、**中間支援団体が教育機関と地域の想いをうまく翻訳して結んでくれると実感しています。**

檜垣 中間支援団体の立場からすると、団体の入れ方に注意が必要です。相手方の立場がわかる人の配置が重要で、ユタロでは教育経験者や公民館経験者を採用しています。経験者を増やすために教育機関、民間、地域間での派遣制度など人材交流をもっと増やした方がいいと考えています。

石川 お互いを知ろうとすること、自分の想いを伝えることが大事です。西益田では、小中学校の全教職員と地域の

人々、子どもたちの代表、コーディネーターなどが集まる「WITHの会」という会議を年1回やっています。この会は子どもたちがやりたいことを言えて叶える場です。全教職員が子どもの想いを共有できる場になっています。

廣田 大人のメリットで言うくと、地域連携が盛んだった前任校では、当初は地域の人が無償で協力してくれていましたが、無償だと継続しません。**生徒と学校と地域のWin-Winの関係が大事。**大人も楽しめて、交通費くらいは提供しないと次につながりません。外部の他業種の方々は教員がもっていないマインドで子どもたちの視野を広げてくれる存在で、外の方に入ってもらった方が確実に教育のバランスがよくなりますから、その方々が生徒と関わって良かったと思ってもらえる仕掛けや配慮も必要だと思います。

また、自分の譲れないことははっきりとお互いに伝えることも大事。私も檜垣さんにはそれを伝えています。

檜垣 異なる立場同士の協働は簡単

ではありません。それには時間も必要で、益田では10年間の活動の蓄積のなかでの信頼関係の連鎖ができあがっています。我々のような中間支援団体ではない一般の方で「コーディネーター的な動きができる市民が続出してきたことも、益田での異業種連携がうまく回っている一因だと思います。

学校と地域の連携継続には、

大人もメリットがある

Win-Winの関係が重要。



廣田先生



益田市はどう変わったのか？

益田市のように学校を開き、地域と連携することで、生徒たちと地域の変化を皆さんはどう感じていますか？

中島 翔陽では1・2年次に「いろんな人とつながって、失敗も経験しておいで」と生徒を外に出すと、いろんなことに挑戦して地域の人にはめられて次に動く力になっています。それが実を結ぶのが3年生です。総合型選抜

の受験者の面談などを通して、さらに伸びていく子もいる。地域での活動が

当たり前になっているせいか、それが

受験のアピールポイントになると自覚

しておらず、教員から「すごいね！」

など声かけすることで気づきになるこ

とも多いです。地域活動で成功体験

を積んだ卒業生たちが、「産業社会と

人間」の授業のロールモデルとなって自

主的に後輩に教えるにきてくれること

も多々あります。

廣田 うらやましいですね。益高で

は総合型選抜が増えるなど少しずつ

変化はあるものの、進学校としてのジ

レンマは探究の発表がある3年生の6

月が過ぎると受験モードに入って、そ

益田には若者たちの「ありのまま」を受け入れる存在が圧倒的に多い。



檜垣さん

れまでの地域の学びがはやけていつて

しまう生徒もいることです。翔陽のよ

うに深掘りした探究にしていけることが

これからの課題です。

檜垣 客観的には、益高で充実した

探究活動ができた生徒は、それが将来

の夢や受験のモチベーションになって

いることも多いと感じています。

三宅 益養は今、地域とつながる基

盤ができてある段階です。本校の生

徒たちは自尊心が低かったり、学

校外の経験値が圧倒的に少なかったの

ですが、学校外でイベントに参加した

り、製品販売のボランティアをする高

等部の生徒が増え始めています。地

域との関わりのなかで少しずつ成功体

験を重ねていることが見て取れるよう

になってきました。生徒たちにとって

地域が身近な存在になり、「してもら

う」ことが多かった生徒たちが「する

側」になってきている。地域の方の反応

を石川さんがフィードバックしてくれ

ることもとてもありがたいですね。そ

れが教員も生徒も次の挑戦へのモチ

ベーションになっています。

檜垣 大学進学などで一度県外に出

ても、その後に前向きに益田に戻って

くる若者が増えています。若者が地

元に戻ってくるときに必要なのは、何

かができる・できないは関係なく、あ

りのままの自分を受けて入れてくれ

る存在の数の多さだと思います。資

本主義社会の原理で測られがちな相

対的な物差しではなく、ありのまま

の自分を、親以外でどれだけの人を受

け入れてくれるか。益田はその存在

が圧倒的に多く、それがライフキャリ

ア教育での大人の変化だと思います。

桐 益田の里帰りは家という建物や

実家だけではなく「人に帰ってくる」

イメージです。それは10年間の取組で、

大人と子どもが学校以外の場所でも

たくさん共通体験を積んできたから。

子どもとの関わりに、大人も参

加して良かったと普通に言ってもらえ

る土壌ができてきました。

石川 翔陽の卒業生で「地域活動を

したいから土日が休みの会社に就職し

学校外で生徒が主体的に地域と連携

公民館・学校外活動

公民館を「ひとづくり」の拠点と再定義したことから、生徒たちが学校活動とは別に自発的にやりたいことを、公民館を利用して活発に行っている。石川さんのような公民館の主事たちが相談役となり、最適な人とつなげたり、場所を提供したりしている。例えば、地元愛の強い高校生が探究活動の延長として、地域の自治組織の会合で、空き家についてのワークショップを行ったり(写真右)、中学生に家庭・学校以外のサードプレイスを提供し、中高生のつながりをつくりたいという想いから高校生が企画したマシュマロトークという対話イベント(写真左)などが実施されてきた。



た」という子がいます。理由を聞いた

ら「子どもたちの『やりたい』を叶え

る大人になりたいから」と。ライフキャ

リア教育で受けたロールモデルの循環

が実っていると感じました。

最後に、地域連携についての皆さ

んの想いをひとつ言わずお願いします。

三宅 地域の方々とつながると自分自

身が楽しいのです。世界が広がって一人

の人間として、人と人との関係性が

豊かになっていると実感しています。

石川 子どもが変わると大人が変わ

り、大人が変わると地域が変わりま

す。その中の一員でいられることがと

てもありがたいです。人同士の関係性

が深くなったことで「安心できるまち

になった」という大人もいます。そう

いう夢や希望を子どもたちの姿を通

して見られているのは、地域にとって

も素敵なことだと思います。

檜垣 やはり10年という継続と積み

重ねが大事だと思います。振り返って

1年目の自分に言いたいことは「闘う

な」ということ。施策を通したくて周

りと軌轢が生じていたこともあります。

今思えば時と相手を間違えていた。

チャレンジする際にタイミングとパート

ナーを見極めることも大事ですね。

中島 地域とつながることは、事前は

不安でしたが、百聞は一見にしかず

です。つながってみると生徒にできそ

うなことがどんどん具体的に想像でき

て実現できました。とにかく「行つて

会つて、やってみる」ことです。やって

みると次につながっていきます。

廣田 地域とつながって偏りのない幅

広い教育を行うことが、子どもたち

の学びを深め、それが子どもたちの幸

せにつながっていくと感じています。

桐 子どもを育てるのは教員だけの

仕事ではなく、教員が思うよりたく

さんの人が協力してくれます。面白

がつて子どもと関わってくれる人がい

ると、中島先生がおっしゃっていたよう

に周りに伝播してつながってうまく回

るようになります。それが子どもた

ちのため、ひいては自分も含めた大人

のためになります。

子どもが変わると大人も変わり、

大人が変わると地域が変わり、

安心できるまちになる。



石川さん

ライフキャリア教育を体験した 卒業生の声

2015年から市が実践してきた「ライフキャリア教育」を受け、学校内外で地域活動を経験した卒業生である大学生と社会人に、経験で得たこと、地域への想いを語ってもらいました。



島田郁子さん

市立吉田小学校→市立益田中学校→県立益田高校卒
島根大学 法文学部 社会文化学科在学中

益田は地域全体が「実家のようなまち」

周りから引かれるくらい益田が大好き(笑)。自然がたくさんあるし、何より人とのつながりが広くて濃い。自分の成長を見てくれた大人がたくさんいるので、帰るたびにまち全体が実家のようなんです。高校時代には自由参加の小学生対象の「対話プラス」に全15校中13校も参加しました。また、高校の課題研究をきっかけにジェンダーに興味をもち、授業とは別に個人でも活動を始めました。考えを深めるためにほかの人の意見を聞くイベントを開催したときに(写真)、探究担当の先生やユタラボの方が伴走してくれました。その経験を活かして総合型選抜で島根大学に合格。現在は大学でジェンダー論について学ぶなかで、ジェンダーは早期教育が必要だと考えるようになり、将来は教員や子どもと関わる仕事を益田でできたらいいなと思いながら、教職課程でも学んでいます。



小野涼太さん

市立豊川小学校→市立益田東中学校→県立益田高校
→大正大学卒 現在は益田市でマルチワークで活躍中

自分が地域のロールモデルの一員と自覚

中学時代に仲間と地域のお手伝いなどの活動をしていて、自分を受け入れてくれて居心地が良い地元が好きになり、将来は地元で貢献できる人になりたいと考えていました。目の勉強が大変で進路について考える余裕がなかった高校時代には、「対話プラス」の授業で地域の方と話したことが立ち止まって将来を考えるきっかけに。自分も貢献したいと小学生と話す役割も買って出ました(写真)。活動の中で出会った地域のさまざまな大人に刺激を受け、大学は東京に出て地域創生を学びましたが、その間も「いつでも帰ってきていい」という地元の温かさを感じていました。卒業後は益田に戻り、現在、ユタラボと保育園でマルチワークしています。保育園では自分がロールモデルになっていることを体感。子どもたちに恥ずかしくない生き方をしなければと日々感じています。

